

人生を拓く ひら

20

ながはら こうじ
長原 幸次さん (84) 西町2

富山県伊布郡から入植した開拓3代目。父幸作さん(86歳で逝去)、母タケオさん(昭和26年ごろ、49歳で逝去)の7人姉弟の5番目として育ちました。第一尋常小学校高等科を14歳で卒業した年に終戦を迎えて農業後継者となり、戦後の農地解放で7ヘクタールの自作農家に。

26歳の時、旧第四小学校の隣、古高家の洋子さん(当時23歳)と結婚。1年後に2・3ヘクタールを分けてもらって分家しました。

結婚した年、大凶作だった記憶がよみがえります。「反当7〜8俵(10坪当たり収量、1俵60キログラム)は取れたもんだ。でもその年は半作しかできんかった」。十分な収入を得るため、間伐材の薪づくり、屋根の雪下ろし請け負い、静岡のみかん畑に出稼ぎ、建築現場の下働きと、冬場の現金収入を補ってきました。

1980(昭和50-60)年代、正月用ミツバの出荷で全国屈指の生産地となった町内先駆けの生産者でした。

「基盤整備で体壊してさ。夏に手術した後、その年はずっと養生していたんだよ。」



「7人で始めて、出面さん30人くらい使っていた。3年目には150坪(1坪は3・3平方尺)のハウスで50人ぐらいに広がったかねえ」。

65歳まで米作り一筋。ハウス野菜は年末年始用のミツバ生産、2月にほうれん草の種まき、4月には水稻の苗づくり、5月にかけて田植えを終えると休む間もなく6月にはミツバの種まき、昨年まではトマト出荷もこなし「あの時頑張ってきたから今があるんだなあ、と思うんだよ」。

妻洋子さん(81)との間に一男一女。米作り引退後、71歳で市街地区に自宅を新築し、ようやく夫婦水入らずの暮らしをと思った矢先、洋子さんは体調を壊して旭川市内の施設に。今は旭川市内の長女(58)が週一回訪ねてくれます。一人暮らしの今も規則正しい生活を心がけています。

俳句

喪中なる葉書の頻り三の酉
雪こんこ背中で足がとんとはね
父もいて母もいましたお正月
日の丸の垂るる平和のお正月
生かされて無心で仰ぐ初御空
病む身にも等しく差しぬ初明かり
冬帽の似合う健さん一周忌
溪流を子守歌とし冬の宿
心と身機を一転し年明くる
雪下ろし待ってる家は主無く
頬被りこれが私の親父です
珊瑚礁ダイビングする賀状来て
去年今年山の手線は環状線
手袋は今日の日差しの忘れもの
シヨウウインドウ冬たちは見つめ合う
元旦や慌てず騒がず健やかに

佐々木 りえ
山内 みゆ
小林 ろぼ
高橋 公花
杉山 ひろのり
保科 なほ
徳光 吐苦
杉山 りつ
こばやし 星来
横田 則子
若田 久
高瀬 潤
石澤 清宏
三島 智
若田 郁
本田 咲

